

第二外国語としてのスペイン語のシラバスについて

著者	田村 美代子
雑誌名	長崎外大論叢
号	2
ページ	101-116
発行年	2001-12-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1165/00000322/



第二外国語としてのスペイン語のシラバスについて

田村 美代子

I. はじめに

近年、各大学で第二外国語の扱いに変化が見られるようになった。以前は文系の学部では週に2コマ、二年間にわたって履修し、8単位を卒業単位として課すところが多かったが(90分×週2回×13週×2学期×2ヵ年=156時間)、卒業単位が6~2単位のところが増えてきている。さらに、一学期のみ1単位の科目(20時間弱)として開講している大学⁽¹⁾まである。時間数が減ってきている代わりに、今まで第二外国語を独占していたフランス語やドイツ語に加え、中国語・スペイン語等が開講され、バラエティー豊かになり学生にとって選択の幅が増えてきて良い面もある。しかし、手持ち時間が短縮され、はっきりした到達目標の提示がないなかで、その限られた時間内で「何を」「どう」教えるか、また実際どのくらいの能力を身につけさせることが出来るのか、どのような目標を設定するのが妥当なのか、色々戸惑うことが多いのが実情であろう。

今までのスペイン語教育では、文型・文法項目・語彙をもとにした構造的シラバスが最も標準的に採用されてきた。今回はスペイン語を大学で教えている先生方が執筆した市販のスペイン語のテキストを調べ、教える側がどのようなことを目標にして「何を」「どう」やって、第二外国語の教育にあたっているかを考察し、将来、より実りの多いスペイン語の授業をするにはどうしたらよいかを考えてみようと思う。

調査した25部のテキスト⁽²⁾は1996年から2001年までの間に日本で出版されたか、もしくは再版されたものである。会話や講読がメインの目的になっているテキストが調べたなかで3部あったが省いてある。

II. テキストにみる教師側の意図

ほとんどの初級テキストが文型・文法項目・語彙をもとにした文法シラバスを採用している。勿論、基礎的なものから複雑なものへと段階的に配列できるこのシラバスが初級段階の組織的な語学教育に適しているからだと思われる。

1 終了に要する期間：はっきりと、どのくらいの期間で教えるかということについて言及しているのは9/25部で、6/25部が一年間週1回の授業で終わるとしていて、3/25部が週

2回で一年間教えるとしている。残りの17/25部については何も書かれていないが、各大学の第二外国語の置かれている状況から考えると週一回の授業で教えることを目指していると思われる。この中で、2部は続編があり、いずれも週二回の授業なら一年で、週一回の授業なら2年で終了するとしている。

2 テキストの目標：まえがきには、6/25部のテキストの著者は目標について特に書いていないが、9/25部で著者はスペイン語の初歩的なコミュニケーションをめざしているとのべている。10/25冊が初級文法の基礎を教えることを目標とし、はっきりと新しい語学の習得には文法の骨組みをしっかりと学ぶことが不可欠であるとしている。目標について明確にしているかいないかは別として、文法事項の説明と練習問題のみのテキストは3/25部で、それ以外は、分量の違いはあるが、会話文を覚えたり叙述文を読むことを通して文法の定着を試みている。8/22部は、文法の説明の後に本文を持ってきているのに対し、12/22部はまず本文を読ませ、そこにある文法事項の説明や練習問題をする形式を取っている。

3 文法シラバス：各文法項目の説明に関しては、大多数のテキストは、使う教員に委ねる形を取っているようである。

テキスト内で表題となっている項目について調べた。表題にならなくても注や練習問題の説明などで扱っているものもあるが、次のリストには含まれていない。文法のまとめを最後に載せて、授業中に扱うことができなくても学生がいつでも参考にできるよう挙げている場合も多いが、そちらは数にいられてある。文法項目の名称は、文法用語を極力使わないようにしているテキストもあり、項目を分けて設けているものは筆者の慣れた表現にまとめた。それについては、あとで述べる。

25部～21部のテキストで扱われている文法項目と語彙

- 1) アルファベット
- 2) アクセントの位置
- 3) 名詞の性と数
- 4) 冠詞
- 5) 形容詞の性数変化
- 6) 指示形容詞
- 7) 所有形容詞短縮形
- 8) 形容詞の比較級（優劣比較・同等比較・最上級）
- 9) 主語代名詞
- 10) 直接目的格・間接目的格代名詞

- 11) 直説法現在形（規則動詞・一人称単数のみ不規則動詞・語根母音変化の動詞）
- 12) ser, estar, hay, gustar文型
- 13) 直説法点過去・線過去・現在完了・未来形
- 14) 無人称のseと三人称複数形
- 15) 再帰動詞
- 16) 現在分詞
- 17) 関係詞
- 18) 語彙：基数・時刻表現・月・日時

20部～16部のテキストで扱われている文法項目と語彙

- 1) 母音・子音・二重母音・音節の分け方
- 2) 形容詞の位置
- 3) 人称代名詞前置詞格
- 4) 不定語・否定語
- 5) 接続法現在形
- 6) 命令形
- 7) 疑問文・感嘆文
- 8) 受動態：ser と estar
- 9) 過去分詞・不定詞
- 10) 形容詞 + menteの副詞
- 11) Hace + 時間の経過
- 12) 関係副詞
- 13) 語彙：序数、曜日

15部～10部のテキストで扱われている文法項目と語彙

- 1) 二重子音
- 2) 縮小辞・増大辞
- 3) al, del
- 4) 所有形容詞完全形
- 5) 絶対最上級
- 6) 不規則な比較級
- 7) 代名詞の位置
- 8) 命令形と代名詞の位置
- 9) 不定詞と代名詞の位置

- 10) 点過去不規則動詞
- 11) 過去完了形・過去未来・未来完了
- 12) 接続法の用法
- 13) 独立文の接続法
- 14) 接続法の過去
- 15) 接続法の現在完了
- 16) 進行形
- 17) estar + PP
- 18) a + 目的語：人
- 19) 現実的な条件文
- 20) 過去分詞の用法
- 21) 知覚・使役・放任の動詞＋不定詞
- 22) 前置詞
- 23) ir a + 不定詞
- 24) hacer する・天気表現
- 25) 国名・形容詞

10部～6部のテキストで扱われている文法項目と語彙

- 1) 注意すべき綴りと音
- 2) 所有代名詞
- 3) 間接目的格代名詞 le → se
- 4) 重複して用いられる間接目的格代名詞
- 5) 定冠詞の代名詞化
- 6) 直説法現在の用法
- 7) 線過去の用法
- 8) 線過去 対 点過去
- 9) 現在完了の用法
- 10) 未来形の用法
- 11) 過去未来完了
- 12) 関係詞節内の接続法
- 13) 副詞節内の接続法
- 14) 接続法過去形
- 15) 接続法現在完了

- 16) 接続法過去完了
- 17) 否定命令
- 18) 単人称動詞
- 19) 再帰動詞の用法
- 20) 後続音による接続詞の変化：y が^se, o が^su
- 21) ser 対 estar
- 22) haber 対 estar
- 23) tener que + 不定詞
- 24) querer, poder の用法

5部～1部で扱われている文法項目と語彙

- 1) 音節
- 2) 句読点
- 3) ローマ字表記と一致しない綴りと発音
- 4) 大文字のアクセント符号省略
- 5) 有声化する音
- 6) アクセント記号で識別する語
- 7) イントネーション
- 8) 正書表
- 9) 強勢符の用法
- 10) 強勢語と弱勢語
- 11) sで終わる名詞の複数形
- 12) 冠詞中性形 lo
- 13) 女性名詞に男性冠詞
- 14) 形容詞の語尾脱落
- 15) su の代わりに de ella, de usted
- 16) 副詞の比較
- 17) 名詞の比較
- 18) más de, menos de
- 19) tú 対 usted
- 20) 主語の位置
- 21) 現在分詞と代名詞
- 22) 相互代名詞 se

- 23) 点過去と現在形共通の活用形
- 24) 現在完了形 対 点過去
- 25) 丁寧な表現（過去未来形）
- 26) 接続法と動詞の不定詞
- 27) 否定疑問の答え方
- 28) 複文
- 29) 話法
- 30) 語順
- 31) 従属節の作り方
- 32) 非文
- 33) 間接疑問文
- 34) tan(tanto)que
- 35) 自動詞・他動詞
- 36) al + 不定詞
- 37) algo que + 不定詞
- 38) 不定詞・現在分詞の受身
- 39) 分詞構文
- 40) lo que
- 41) saber 対 conocer
- 42) oír 対 escuchar
- 43) tener
- 44) poder 対 saber
- 45) por 対 para
- 46) había 対 hubo
- 47) también, tampoco
- 48) acabar de + 不定詞
- 49) llevar + 期間
- 50) 基本形容詞
- 51) 時の副詞句
- 52) 前置詞句
- 53) 基本動詞
- 54) 文の要素

- 55) 名詞基本構造
- 56) 基本文型 (I~X)
- 57) 語形成
- 58) 人称代名詞のまとめ
- 59) se のまとめ
- 60) 直説法時制のまとめ
- 61) 命令形のまとめ
- 62) 接続法のまとめ
- 63) 基本重要表現
- 64) 関係詞節のまとめ
- 65) 動詞の活用表
- 66) 出現語彙集

4 テキストの文法項目について：ほとんどのテキストで項目の出現順序は多少違っていてもあまり大きく入れ替わることはなかった。それはやはり文法的に基礎的なものからより複雑なものへ順番に配列されていて、全てのテキストで文法的な難易度と学習の難易度に配慮されているからだと思う。

スペイン語の文法は動詞の用法が重要で、時制をマスターすると文法は一通り終了したとみなされる（スペイン語技能検定を参照）。ほとんどのテキストが直説法の時制の現在形だけでなく、点過去、線過去、現在完了、未来形まで扱っている。25部中16部以上、つまり半分以上のテキストが接続法の現在形まで出しており、さらに25部中11部以上が過去完了、未来完了、過去未来完了や接続法の過去形、現在完了、過去完了など現代のスペイン語で使われる全ての時制を紹介している。英語が得意な学生は、類推で理解できるのかもしれないが、大多数の学生にとっては、かなりの負担になるであろう。（ELEとUSO Elemental には、コミュニケーションを主体にしているので単純な比較はできないが、時制では前者には現在形の他少し現在完了形が、後者には点過去・線過去が少しだけ出ている。）

テキストによっては、文法事項に独自の用語が使われていることがある。また、広く使われているが違う名称で同じ文法現象を表しているのもある。例えば、知っている人間にとってはなんでもないことであるが、所有形容詞には、前置形・後置形、短縮形・完全形、無勢形・強勢形がある。過去時制では、スペイン語の古い名称をそのまま直訳した不定過去・不完了過去があまり使われなくなって、和製の文法現象を視覚的に捉えた線過去・点

過去が主流になりつつあるが、線過去については他にも未完了、半過去の名称、点過去には過去形、完了過去、単純完了過去などの名称がある。

これは調査したテキストだけの問題ではないが、学生が参考書や他のテキストを使って勉強する際、混乱の原因になると思われる。

全テキスト中、1テキストだけが表題を挙げて取り扱っているもののなかでもっと重要視されるべきではないかと思われる項目が二つある。一つは、tú と usted の問題である。確かにtú とusted の使い分けは文法的に難しいわけでもなく、動詞の活用形等の練習問題で違いを簡単に教えることができると思う。しかし、コミュニカティブなスペイン語での使い分けはもっと丁寧に教えるべきではないだろうか。文法的な面のみに気をとられている証拠に、全てのテキストでusted, ustedesは主語代名詞一覧表の三人称の枠の中に入っている。確かに、文法的には三人称と同じ扱いになるが、ustedはあくまでも二人称である。

もう一点は、文型を扱ったテキストが一部しかなかったことである。スペイン語は第二外国語であるから、すでに英語で文型を習得した人に教えるので、英語との違いに少し触れるだけで充分と思っただろうが、英語の文型が頭では分かっているモデルのない状態で、つまり真似る文がない状態で和文西訳や作文をさせたとき、日本語をそのまま単語だけ入れ替えた文を作る学生がかなりいることに驚かされるのは筆者だけではないとおもう⁽³⁾。

III 授業時間数と語学力

第二外国語のスペイン語の授業では、教える側は限られた時間内で何をどう教えたらよいか。手持ちの時間で現実的に何ができるのかを考えなければならない。

文部省の中学校の外国語指導要領には三年間（一年＝33週）、週3回の50分授業（計247.5時間）で、語彙900語、及び初級文法の基礎を教えることになっている。初めて外国語を習うということと、中学生なので参考にはならないが、第二外国語の授業と比べるとかなりの時間を費やしているのは確かである。まず大人がどのくらいの時間をかければどの程度の語学力がつくのかを外国語の検定試験の基準に示されているので見たいと思う。

日本語能力検定の認定基準

級	認定基準	語彙数	学習時間数
1	高度の文法・漢字（2,000字程度）・語彙を習得し、社会生活をする上で必要であると共に、大学における学習・研究の基礎としても役に立つような、総合的な日本語能力。	10,000 語程度	900時間程度
2	やや高度の文法・漢字（1,000字程度）・語彙を習得し、一般的なことがらについて、会話ができ、読み書きができる能力。	6,000 語程度	600時間程度、 中級日本語コース終了
3	基本的な文法・漢字（300字程度）・語彙を習得し、日常生活に役立つ会話ができ、簡単な文章が読み書きできる能力。	1,500 語程度	300時間程度 初級日本語コース終了
4	初歩的な文法・漢字（100字程度）・語彙を習得し、簡単な会話ができ、平易な文、又は短い文章が読み書きできる能力。	800語 程度	150時間程度 初級日本語コース前半終了

母語が日本語でない人がどのくらい学習すれば、どのレベルになるかである。漢字の問題もあり、日本人がスペイン語を学ぶよりは学習時間数がかなり多く必要であると思われる。

実用英語検定試験

級	認定基準	語彙数	学習時間数
1	広く社会生活に必要な英語を十分に理解し、自分の意思を表現できる。	約10,000～ 15,000語	大学上級程度
準 1	日常生活や社会生活に必要な英語を理解し、特に口頭で表現できる。	約7,500語	大学中級程度
2	日常生活や職場に必要な英語を理解し、特に口頭で表現できる。	約5,100語	高校卒業程度
準 2	日常生活に必要な平易な英語を理解し、特に口頭で表現できる。	約3,600語	高校中級程度
3	基本的な英語を理解し、特に口頭で表現できる。	約2,100語	中学卒業程度

4	基礎的な英語を理解し、平易な英語を聞くこと、話すことができる。	約1,300語	中学中級程度
5	初歩的な英語を理解し、簡単な英語を聞くこと、話すことができる。	約600語	中学初級程度

外国語指導要領では、中学校で学ぶ語彙数は900語とあったので、3級に合格するには週3日の授業では無理で、塾などに行って学習する必要があるようだ。

実用フランス語技能検定試験

級	認定基準	語彙数	学習時間数
1	高度の内容を持つ文を含めて、広く社会生活に必要なフランス語を十分に理解し、自分の意見を表現できる。	特に記載なし	600時間以上
2	日常生活や普通の職場に必要なフランス語を理解し、特に口頭で表現できる。		400時間以上 4大のフランス語専門課程4年程度
3	基本的なフランス語を理解し、簡単なフランス語を聞き、話、読み、書くことができる。		200時間以上 大学の2年修了程度
4	基本的なフランス語を理解し、平易なフランス語を聞き、話、読み、書くことができる。		100時間以上 大学の1年修了程度
5	初歩的なフランス語を理解し、平易なフランス語を聞き、話し、読むことができる。		50時間以上 大学の1年前期修了程度

4級の100時間学習ということは、大体週3コマ90分の授業を受けた勘定になるので、第二外国語の学生ではなく専門的にフランス語を学んでいる人が合格できる級のようなのである。

ドイツ語技能検定試験

級	審査基準	語彙数	学習時間数
1	広く社会生活に必要なドイツ語を十分理解し、高度の内容を持つドイツ語を聞き、話し、読み、書くことができる。	特に記載なし	大学や語学研修等で約600時間以上の学習者
2	日常生活や仕事上で必要なドイツ語を理解し、一般的なドイツ語を聞き、話し、読み、書くことができる。		約400時間以上
3	一通りの文法知識に基づいて基本的なドイツ語を理解し、簡単なドイツ語を聞き、話し、読み、書くことができる。		約200時間程度
4	初歩的・基礎的なドイツ語を理解し、ごく簡単なドイツ語を聞き、話し、読み、書くことができる。		約80時間程度

フランス語検定もドイツ語検定も語彙数に関する基準がないが、中国語では4級は日常生活語彙500～1,000語程度、3級は一般常用語彙1,000～2,000語程度、準2級は常用語3,000語以上を完全にマスターしていることが求められている。上の級に関しては語彙数の記載がない。

スペイン語技能検定

級	検定基準	文法項目
1	会議通訳、文学翻訳、専門ガイドができる。	
2	ラジオ、テレビが理解でき、一般通訳ができる。	
3	新聞などが理解でき、一般ガイドに不自由しない。	
4	簡単な日常会話ができる。	文法を一通り修了。
5	平易な文章の読み書きができる。	初級文法（直説法）修了。
6	基礎的な短い文章の読み書きができる。	直説法現在形修了。

スペイン語技能検定は文部科学省認定になっているが、他の外国語の検定とは級の設定の仕方や試験そのものにもかなり違いがある。「目安として6級は英検の4級、3級は英検の準1級にほぼ相当します。」と、実施要項のパンフレットに記載がある。

これらの言語が話されている国の外国人対象の検定試験に関しては、いくつか見てみたがインスティトゥート・セルバンテスの試験要項には見当たらなかったが、ドイツのゲーテ・インスティトゥートの試験には受験資格として基礎修了レベルの人は約400～600時限（一時限は45分なので300～450時間）のドイツ語の授業を受けていることが求められ、中級は800～1000時限、上級は1000～1200時限となっている。

これらの検定試験の認定基準を見ると、外国語の学習にはかなり時間をかけなければいけないということが明確に分かる。また、ある一定のレベルまで語学力を伸ばすには、母語を覚えるときほどでないにしても、それに見合う時間数を積み重ねないとできないということを示している。勿論それを全て教室の中でしなければいけないということではないが。受けた授業時間数と語学力が連動しているということは、第二外国語として開講されている週2回で約80時間とか、もしくは週一回の約40時間の授業では、検定試験が受けられるレベルに達しないことになる。

また、スペイン語の検定試験以外は一番低い級から聞いたり話したりする能力を問うている。つまり、公の基準では4技能全てがどのレベルにあるかを認定することになっている。

大学の第二外国語のカリキュラム作成に携わった人々は、例えばどのレベルを目標に置いて単位数を設定したのか、疑問に思う。第二外国語を教える者として考えれば、理想的には第二外国語の授業が200時間くらいあり、英検、仏検、独検の3級程度のレベル「一通りの文法知識があり、基本的な“スペイン語”を聞く、話す、読む、書くことができる」ように教育することではないかと思う。

IV 第二外国語としてのスペイン語のシラバス

一般社会人対象のスペイン語クラスであれば、受講者のニーズ⁽⁴⁾をまず調査し目標を立てる。しかし大学の教養としての外国語なので、学生のニーズというよりは大学のカリキュラム規定に従うことになるだろう。担当者、もしくは担当者グループに任されていると言った方が良いかもしれない。学生のニーズは、「ちょっとした旅行会話ができるようになりたい」というところが多いようだが、学生が将来どこでどのような形でスペイン語を必要とするかもしれないので、その時役に立つ基礎をしっかりと身に付けさせておくことが重要であると多くの教師は考えているようである。第二外国語用のスペイン語のテキスト調査から分かったことも、週1コマの授業でかなりのテキストが文法を一通り全部、もしくは直説法の全時制の習得を目指していることである。短い時間内で教えるには、せめ

て文法の知識だけでも身に付けてほしいと教師側は切実に思っていることがよく分かる。確かに文法を勉強すれば、辞書を使いながらかなり難しい文も短期間で読めるようになる。現に、最近まで第二外国語の2年次ではその言語の文学作品を教材に使う先生もおられ、暗号解読のような作業だが可能であった。

しかし、本来の外国語学習は、その外国語でのコミュニケーション能力を身に付けることであり、それはコミュニケーションの体験を多く積み重ねる事によってのみ得られる。母語の自然習得を考えれば、文法についての知識は、言語獲得に不可欠ではないことがわかるが、持っていればそれだけ学習が容易になるものである。しかし、スペイン語の構造をいくら知っていてもそれだけでは人と意思を通じ合わせることはできない。コミュニケーション能力の養成はよく自転車に乗る練習にたとえられるが、むしろテニスを覚えるようなもので、ゲームのルールが解かり、ひじや体の使い方を素振りをしながらマスターしても、練習試合を重ねて、最終的に本当の試合をしなければ、相手との駆け引きなど身に付かないし本当のテニスの楽しさは味わえない。

コミュニケーション能力を育てようとするれば、膨大な時間が必要となる。しかし時間は限られている。限られた時間内でできるだけ多くのことを習得して欲しいとなるとやはり「文法」シラバスを採用するということになるだろうが、筆者としては時間が少ないからこそコミュニケーション能力の育成の方をとりたいと思う。(筆者の週一回のクラスでは場面的シラバスに従って、買い物、レストラン、病院等の各場面で使う表現を覚え、応用していく形をとっている。) その理由としては：

- 1 学生の希望が多い。
- 2 機会があれば習った表現をちょっと使ってみることができる。
- 3 授業が楽しい。活き活きとした雰囲気がつくれる。
- 4 初級文法を一通り使えるように教えるには時間が足りない。中途半端になる。
- 5 文法中心にしているときよりも、語彙、句型などが自然に身についている。
- 6 スペイン語とは関係ないが「話そう」、「聞こう」とする態度が育っている。

欠点としては、次のものがある。

- 1 応用力がつかない。
- 2 文法の質問がでたとき、困ることがある。
- 3 教えられる絶対量が少ない。

週一回の授業でほとんどの市販のテキストで扱っている直説法の時制を全てをみるだけでもかなりの詰め込みだと考えられる。学生に文法を意識化させることで定着度をあげることに成功した例⁽⁵⁾も報告されているが、意味のわからない、始めて見る文にでてくる文

法事項の説明を聞き、練習問題をして、本当に使える形で習得しているのだろうか。教師自作のテストでよい点が取れても、それは「語学力がある」を意味するとは限らない。

第二外国語の授業の目標を設定し、授業をある一定期間行なった後、目標到達度を測定するテストを行うことになるが、そのテストと共に長崎外国語大学のフランス語コースではフランス語の検定試験を受験させている。そのことにより、客観的に、より正確に学生の能力と教師の教育の成果を測ることができている。学習時間数と到達目標がはっきりと規定されているので、全国的に一つのものさしで測ることができることに大きな意義があると思う。場合によっては授業時間数と、検定試験でレベルの目安としている時間数は一致しないこともある。また、スペイン語検定の場合のように、級の設定、検定基準の内容等英語検定、フランス語検定やドイツ語検定などかなり異なり、さらに試験の内容自体、問題の出題数や出題方法の違いがあり、客観的で安定した結果が出にくい試験になっていることは残念なことである。

V おわりに

外国語の習得にはかなりの時間数が必要で、大学での語学教育では、1コマならこのぐらいのこと、2コマなら、3コマならとはっきりとした目標を掲げ、検定試験などと連携させながら学生に明確なゴールを与え、自らそれに向かっていくように仕向けることができたら良いと思う。

現在のほとんどの第二外国語用テキストが文法シラバスを採用し、週1コマの授業で消化するには多すぎる文法項目を挙げている。それらを充分使いこなせる形で習得でき、また講読や西文和訳が最終目的であるならば別だが、中途半端で終わるようであればコミュニケーション能力の養成の初歩の初歩、簡単なサバイバル用スペイン語の習得を目指し、将来文法も勉強しスペイン語をマスターしたいと思わせるよう楽しく学ばせることを勧めたい。

最後に、初級スペイン語の用語の統一やスペイン語能力が安定して客観的に測れる統一テストの開発など、スペイン語教育の環境を少しずつ整えていくことと共に、語学教育の授業時間を増やす方向で、全国のスペイン語教師が協力し合っていかなければいけないと思う。

注

- (1) 長崎大学に於いては、20数年通年2単位科目として週一回90分のスペイン語の授業があったが、セメスター制移行と共に、外国語関連科目として1セメスターのみの1単位科目になった。
- (2) 調査した文法シラバスに従ったテキストは以下の通りだが、その他講読中心のテキストと会話中心のテキストは合わせて3部あった。(著者名としては、複数の場合日本人名で先に記されているものをあげている。)

著者名	著書名	出版社	出版年
飯野 昭夫	第二語学のスペイン語	第三書房	1996
石原 忠佳 他	コミュニケーションのスペイン語	大学書林	再版 1996
糸魚川美樹 他	ミラ	同学社	2001
上野 勝広	新世紀のスペイン語	同学社	2001
大岩 勉 他	はじめて学ぶスペイン語	第三書房	1998
霞 洋子 他	オラ・アミーゴス	芸林書房	1996
木村 琢也	スペインへのパスポート	同学社	2001
木村 琢也	スペイン語へようこそ!	同学社	2000
小池 和良 他	スペイン語を学びましょう	朝日出版社	1996
小林 一宏 他	改訂版 スペイン語との出会い	第三書房	2000
佐々木克実	スペイン語との出会い	芸林書房	1997
佐藤玖美子	新・何を話しましょうか	芸林書房	2001
ソニア 細野 他	カミノ レアル	白水社	1996
アントニオ ルイズ ティノコ	スペイン語を始めましょう	芸林書房	1998
出口 厚実 他	アデランテ	第三書房	1997
寺崎 英樹	スペイン語文法のシステム	同学社	2000
土井 信 他	メタ	芸林書房	1999
東京大学スペイン語部会編	CD-ROMで学ぶ初級スペイン語	朝日出版社	2000
西川 喬	新スペイン語ゼミナール	第三書房	2001
西川 喬 他	初級スペイン語講座	芸林書房	2000
野間 一正 他	やさしいスペイン文法読本	第三書房	再版 1998
野間 一正 他	やさしいスペイン文法読本 2	第三書房	1998
坂東 省次 他	コミュニケーションのためのスペイン語	第三書房	1999
福嶋 教隆	コミュニケーションのためのスペイン語	芸林書房	1999
淵上 英二 他	確認して進むスペイン語	朝日出版社	2001
淵上 英二 他	わかるスペイン語入門	芸林書房	1999
本間 和幸	「スペイン語好きですか？」	朝日出版社	2000
山口 忠志 他	スペイン語を始めよう	第三書房	1996

- (3) 上田博人、2000 の「符2」自由作文の例にある東京大学の初級授業の学生の作文を見ると

確かに伝達機能は十分果たされているが、それは文型に従った文が出来上がっているからであると言える。細かい文法的な間違いがあっても解読可能である。

(4) 毎年第二外国語の受講生に簡単なアンケートを行っているが、この三年の統計をとったら次のような結果になった。学生のニーズは、やはり「話したい」であった。

1 どうしてスペイン語を選択しましたか？

- | | |
|-------------------------|---|
| a) 将来就きたい仕事にとって必要だから | 0パーセント |
| b) もしかしたら将来役に立つかもしれないから | 33パーセント |
| c) スペイン・中南米に興味があって | 21パーセント |
| d) スペイン語が日本人にとって易しいと知って | 13パーセント |
| e) とりあえず単位が必要なので | 17パーセント |
| f) その他 | 16パーセント (友達に誘われて、授業が面白そう等 e) に入りそうな理由が多かった) |

2 この授業で貴方の目指すことは？

- | | |
|-------------------------------------|---------------|
| a) 単位取得 | 32パーセント |
| b) スペイン語とはどんな言語かを知る | 14パーセント |
| c) 旅行でもしたとき辞書片手に困らない程度のスペイン語が言えるように | 42パーセント |
| d) 将来スペイン語を自分で続けるための基礎 | 11パーセント |
| e) その他 | 1パーセント (検定、等) |

3 授業ではどんなことに重点をおいて欲しいですか？

- | | |
|------------|----------|
| a) 会話の練習 | 59パーセント |
| b) 文法説明・練習 | 22パーセント |
| c) 講読・西文和訳 | 0.7パーセント |
| d) 作文・和文西訳 | 11パーセント |

(5) 上田 博人2000.

参考文献

石田敏子. 1998. 改訂新版4版『日本語教授法』大修館書店

上田博人. 2000. 「第二外国語としてのスペイン語教育—文法の意識化と「授業レポート」—」『スペイン語学研究 15』

田中望. 1988. 『日本語教育の方法-コース・デザインの実際—』大修館書店

Nunan, David. 1988. *Syllabus Design*. Oxford University Press

e-mail : tamurang@orange.ocn.ne.jp